

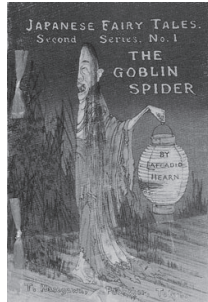
長谷川武次郎に協力した外国人たち

コレクションより (43)

年』、第24号『団子をなくした婆』、第25号『ちんちん小袴』、さらに“Japanese Fairy Tale Series 2nd Series”の第1号で『蜘蛛』を翻訳します。特に彼に関しては別に帙付きちりめん本の“Works of Lafcadio Hearn”（『ラフカディオ・ハーン全集』）があります。これは全5冊から成り、既述の4作品と共に新たに『若返りの泉』が収録されています。



『団子をなくした婆』



『蜘蛛』

この“Japanese Fairy Tale Series”はExtra（番外「日本昔噺」シリーズ）が刊行されていますが、これには「米国人ミロル著」との記載があります。これはエドワード・ローゼイ・ミラー（Edward Rothesay Miller, 1843-1915）のことです。彼はアメリカ長老派の宣教師で明治五（1872）年に来日して布教活動に携わり、後に改革派系の布教団体に転じました。フェリス女学院をつくったM.E.ギダー（Mary Eddy Gidder, 1834-1910）と結婚して彼女の事業を助けた人物です。

■ちりめん本の拡がり と 日本文化の発信

このように、本学のちりめん本コレクションを見る限り、“Japanese Fairy Tale Series”（『日本昔噺シリーズ』）の英語版とこの刊行後に作られた補遺的なもの、さらに『ハーン全集』を含め6種類のシリーズが確認でき、そこでは6人の外国人が訳述に携わりました。彼らの多くは日本と日本人に関わる職業を持ち、武次郎に協力する時点で既に大きな業績を挙げ、日本文化に精通していたのです。こうした翻訳者の人選が出版事業を成功に導いたのではないのでしょうか。

やがて、『日本昔噺シリーズ』の英語版からは他の言語圏の人たちの協力を得てドイツ語版やフランス語版、スペイン語版、ポルトガル語版などが生まれますが、ちりめん本自体もシリーズの扱いから離れて単行本形式で日本文化を紹介する書物にも広がります。また、年ごとに刊行する冊子体の暦で日本文化を紹介した「カレンダー」や外国の文学を対照としたものにもまで発展しました。

さらに、言語的な視点から見ると、縮緬紙を使わない平紙本を含めてイタリア語やスウェーデン語、ロシア語など他のヨーロッパ言語にまで及んでいたことが分かっています。

このちりめん本の多くは、日本から離れる外国人によって持ち帰られました。武次郎が優れた洞察力と卓越した経営手腕を発揮してドイツなど海外の書籍商と提携を結んだことで欧米諸国に大きな広がりを見せました。これによって、伝承文学を紹介したこの書物に見える日本人の規範意識や判断基準などの精神性はもとより、絵師が描く絵画や和紙を使った伝統的書物の製本技術への再認識にも繋がりました。さらに、結果的に慶応三（1867）年のパリ万博前後から欧米に根付いていた「ジャポニスム」の価値を一層高める「海外発信」になったのです。

日本国内では、この人気に追随しようと同種の書物がつくられましたが、長谷川弘文社、すなわち武次郎のちりめん本の質と量、そして外国人からの協力体制を上回ることはありませんでした。

----- 主な参考文献と脚注

- (1) 中野幸一・榎本千賀編『ちりめん本影印集成 日本昔噺編』全4冊 勉誠出版 2014年。長谷川武次郎の没年に関しては諸説があるが、ここでは墓碑を確認したとする本書の説を重視する。
 - (2) 石澤小枝子著『明治の欧文絵本 ちりめん本のすべて』三弥井書店 2004年。石澤氏は本書で武次郎と外国人との接触について述べ、「三つの道筋」として宣教師グループ、お雇い外国人、そして外務省関係の高官を挙げる。(219頁) 実際に英語版「日本昔噺シリーズ」以降の展開をみると、この形が鮮明に浮かび上がる。
- 『文明開化期のちりめん本と浮世絵』京都外国語大学付属図書館・京都外国語短期大学付属図書館編・刊 2007年。

おく まさよし（司書・事務長）